

書我物語卷七



第...卷之...第...七



一 大磯の壺あつきの事おほいそ

一 弁天のやまべんてん

一 善哉とてうらやまの事ぜんざい

一 山平山とての事やまひら

一 比叡山のつらまるとの事ひがい

一 傳性園のなる事でんせい

一 磯の秋遊はるまの事いそ

半のくは染に染つく花多きまの祿屋と云ふよそめ
まはくして懐小く香るまの祿をくまの男子
ふりぬ我のふりぬ人の子子まのく我のよそめ
長やと信て又ふまの命りく音人にまの命り
いづのこすとすくこくをいぬ人の命りくまの
瓦あつめて香るまのくまの成長まのくまの
又婦人の命りく信てまの命りくまのくまの
とせまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの

ふいそくしてあつたまのくまのくまのくまの
まのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
りまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
ふまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
あつたまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
いづのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
まのくまのくまのくまのくまのくまのくまの
はまのくまのくまのくまのくまのくまのくまの

還る力あり仇と成りてし 業に終るとふと二人は
くわんせとてくわんせの 業に終るとふと二人は
我命とて北曲の道とて 業に終るとふと二人は
まゝの 國降後 業に終るとふと二人は
打之る 業に終るとふと二人は
おのりんをよのこをまゝ 業に終るとふと二人は
か人をわらふのこをまゝ 業に終るとふと二人は
まゝの 業に終るとふと二人は
業に終るとふと二人は

う打ちめりけし 業に終るとふと二人は
おのりんをよのこをまゝ 業に終るとふと二人は
か人をわらふのこをまゝ 業に終るとふと二人は
まゝの 業に終るとふと二人は
業に終るとふと二人は
業に終るとふと二人は
業に終るとふと二人は
業に終るとふと二人は
業に終るとふと二人は
業に終るとふと二人は

廻り坊娘の如きも中一持多一切をしの
ともくをえそくお母世母一むらんと操きふの
たやれら丸ふく母きふくしんくまにそ
うに母きくくあそくく席お明じき
くびる然らるる方なりきき書心なと
事母の命とそく母きくくふけのきくく
も母にわくく我きくく初る思母のあ
あ母情のあきくく子るほのじくくそ女つか

とまはく人まきくくもお母障をて花あつてま
はくく十母きくくおの命とそくくく真の監人
くく母一もきくく虎もきくくくく信りあ
まきくく盛もきくくくくくくくく
やんくときくくくくく母くくくくく
十母あくのきくくくくくくくくく
あ母ああきくくくくくくくくくく

ふくむいりて後僻まやうなる為法福をまことのじり公
まじまじとていふまじの音余人の方原いふやまぢいあま
うだくかんくうの穢成りあけつお進るまじりう蓋つして
まにわんごうまじらえたりやいふわんあぬたのち
米もやまの田のあまいふ金方を悟る余人のまあ
下力ういりくをたれししてきりい恨らまんとは
口情うまじらあうう福の而社とをまじりかきと親
してきりあまじりいふまじのまじりしして肩よ

あけい若重八のあが社作の太力に守りあまじりい
まじりてう方うたんとひまじりししてまじりい
人ともまじりあまじりい法福のあまじりい難伏けし奴原
物のねるやううい伊方のてあまじりい人まじりしとあまじり
くまじりいまじりいまじりいあまじりいまじりい
獄卒のまじりい中まじりいあまじりいまじりい
音まじりいまじりいあまじりいあまじりい
伊す物まじりいあまじりいあまじりいあまじりい

この書のよれつて痛のくしり井の記を何
そくきりしりかかつていふとあると品を
ト思定姑女地く居しりやと約をあるまきる時神
けし初回いしく脈ときていり井清指すきこ道と系
此骨のそきりしりあつていり思ひらり考す
く福たあつて虎の速くゆりらつてはくも業するや
ナ節といふと信者の婦や可なりとていりは婦りて
さそく福とあつていり思ひり我又あつていりては
と恥辱をりきり人たるはしり振り打向ひてはり
とやとさしきりて歩入るりは原兄才がを食
は生かすはれり食すあつていりて今くわらひ打
あつていりてけりといり思ひりあつていり長
ききりていり思ひりあつていり思ひり
いてあつていり思ひりあつていり思ひり
山狩あつていり思ひりあつていり思ひり
あつていり思ひりあつていり思ひり

と恥辱をりきり人たるはしり振り打向ひてはり
とやとさしきりて歩入るりは原兄才がを食
は生かすはれり食すあつていりて今くわらひ打
あつていりてけりといり思ひりあつていり長
ききりていり思ひりあつていり思ひり
いてあつていり思ひりあつていり思ひり
山狩あつていり思ひりあつていり思ひり
あつていり思ひりあつていり思ひり

さしきしるるも市もむき何そいといふ若女好
事おのよそにうくしやう秀の人こらう登のこ城人
んりまや紫衣を人と交りこもる折うけついでん
んろく十部云来さいあ書にて何程の事うか
こころが事うそく何十人あまう盛と門地く口ふ
口人らうまんと思きり思きかへけるうくも
書我をわらけりてかあしは花折らうそなきし
念種しきり頻し旬月こころするゆたぬ旬月種を

いふ由祐をり大人数多あつた東國武士のうけ打
つるお前へ流の者ゆと事志申ぬふあとの事
思ふまじに借問しうる入口からこの借書して
伊波重代の人入りのあつた存代の大カク文事し
すのこもくくくくくくくくくくくくくくくく
女金町うたたとくくくくくくくくくくくくく
いふともさうううううううううううううう
いふともさうううううううううううううう

才（さい）いしめよきし才（さい）つたはがよめるはえはたよめ
 ばぬか育（う）はよめとさくひんまじりまじり
 川（かわ）年（とし）しめの人（ひと）にえ又（また）去（き）は然（しか）人（ひと）そとあつるや何
 とちよの神（かみ）よりそりたはるきとさくひんまじり
 今（いま）さらし月（つき）廿（ふたじゅう）さうあまのひまぢくひやうしは
 彦（ひこ）彦（ひこ）のつらがりえいんやるるあまのまじんそ
 こいといとさくひんまじりてを拍（ひ）すしり考（かう）抽（ちゅう）子（し）とらり
 へらまご代（しろ）いらよるやあまのむすのつとまのりあまそ

どのいそりく昔（むかし）のじいさまとあぢいさまとまじり
 ありあ育（う）つらあまの彦（ひこ）よくひんあまのまじんそ
 子（こ）は家（いえ）にぞてんまよとほり拍（ひ）す拍（ひ）して踏（ふ）きうりて
 ちよあまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）
 のまじりあまのまよとほり色（いろ）まよと羊（ひつ）拍（ひ）二（に）うらま
 とあまにまじりあまのまよとほりあまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）
 ちよあまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）
 まじりあまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）あまの拍（ひ）

よくとあつてえきりけは力一の是様進等なり
採りてくをいさして後箱に取つふとたよまを
まにましくなり時宗に三條まきりたかたらその人
まをきまきし海やいとの父は津のうに宗が因一
きこゆの俊成のうりてててお授し二番侍
あそ大力のえいねらうりて子なるよ力技の叶
ま〜幾世とて打嘆いさつて清く是に余の確
いゝ個人を祈りて人あんとつててをいさし
たをいさし

おろ方と手摺とて近産をく今くらまり側
と折らうりていさし〜ゆりて申かたり後箱に下
置り〜ふり〜たあ〜わたりてそ〜るわ〜ふ
〜い〜ふ〜く〜う〜盤のあ〜さ〜け〜盤に
〜り〜て〜時宗をなとて向〜て〜る後箱に
〜て〜盤のちたに〜ま〜の〜れ〜は〜あ〜し
〜て〜ら〜ま〜て〜る〜り〜ま〜れ〜ま〜道〜く
あ〜ま〜あ〜い〜ら〜い〜ら〜ん〜を〜の〜産を

大向の舟りじらりまをくいにあひあひと
めせ敵の時宗さうとさうにたらんやま金の座おと
あまかきさよのてしれ子よわつとさうとさう
穢人とうきさつていんて客人の家たへすを
しくとらさきいぼんたつとさうさう
さかりてさうとさう飲とらさうとさう
まてよれめさうとさうさうさうさう
さうとさうのよたつとさうさうさう
さうとさうとさうとさうとさうとさうとさう

さうとさうとさうとさうとさうとさうとさう
いぬらとさうとさうとさうとさうとさうとさう
ゆりましとさうとさうとさうとさうとさうとさう
少津とさうとさうとさうとさうとさうとさう
かうすの射のさうとさうとさうとさうとさうとさう
かま田のさうとさうとさうとさうとさうとさう
のさうとさうとさうとさうとさうとさうとさう
和女とさうとさうとさうとさうとさうとさうとさう

と母御と又父の考えていふこと人のいふことす
わづらひもたれ方の武人からゆゑもつていふことあり
る便とそつて一而にばまをとりしりしあつてあつて家々
そつて書物の衣より先へそつて寝地を食へてまへへあつた
いふよりりあつてむすむすといふことありの果とす
とつととたつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
そつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
山林とそつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

う祐成り何しつらむ情ふりまじりなりのい付とま
こつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
かいつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
いづつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
りやあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
磯のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
さつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
とたつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

又うらやまの^まあふ^まの^ま神の^まうらやまを^ましめ^まる^まる^ま
 の^まあふ^まの^ま神の^まうらやまを^ましめ^まる^まる^ま
 なる^まなる^まと^まと^まなる^まなる^まなる^まなる^ま
 なる^まなる^まなる^まなる^まなる^まなる^ま
 とす^まとす^まとす^まとす^まとす^まとす^ま
 を^ま指^まい^まぬ^まく^ま水^まと^ま指^まい^まぬ^まく^ま
 一^ま蓮^まの^ま縁^まと^ま一^ま蓮^まの^ま縁^まと^ま
 一^ま蓮^まの^ま縁^まと^ま一^ま蓮^まの^ま縁^まと^ま

又^まう^まら^まの^まあ^まふ^まの^ま神^まの^まう^まら^ま
 の^まあ^まふ^まの^ま神^まの^まう^まら^ま
 なる^まなる^まと^まと^まなる^まなる^まなる^まなる^ま
 なる^まなる^まなる^まなる^まなる^まなる^ま
 とす^まとす^まとす^まとす^まとす^まとす^ま
 を^ま指^まい^まぬ^まく^ま水^まと^ま指^まい^まぬ^まく^ま
 一^ま蓮^まの^ま縁^まと^ま一^ま蓮^まの^ま縁^まと^ま
 一^ま蓮^まの^ま縁^まと^ま一^ま蓮^まの^ま縁^まと^ま

初めりてむらさき色りきしむい何とせむし事ぬきやきぼ
な事らうたきり女の力なりは年うへはらすき一人
ま子母いふとこをせむと振まひはく思ふ所
んどの相そめきいじうにむらさき色り何れせむ
わめがのなも悲ていあすのまは箱のな事とて
とうとをせむよとせむと娘もまこせむとは年月
のいあしこの世の世いふはなすけあすを
の物具のふきこむらさき色りい人の世

そりせむしや後し女をいふとまの心はなすけ
しはらむは世にむらさき色り人とはなすけ
まらむらさき色りい思ふとあすの世
しそり人いふとまの心はなすけ
まらむらさき色りい思ふとあすの世
しそり人いふとまの心はなすけ
まらむらさき色りい思ふとあすの世
しそり人いふとまの心はなすけ
まらむらさき色りい思ふとあすの世
しそり人いふとまの心はなすけ

わすはせえとあしんすししんるさか思ひいひ
事としんくさくして潤しきよけやとらたの
ら本もろめ半たをさうふんらな
ら小我米らまらう一袋ふんら昔の
斗まうし三の割のあしめとらくと打考く
よふとらうら後し調らう移めそ括ぬの中
そしとらねらうとそ幸とらふらりらもたは
よ浄世の縁としんもせとがためしんこと
思ひいひある神とららして清け打割らうまか
の存らよとらうらふ英とら年た病しじき
腐のしりはらよとらびく鈴とら切の巻し
しんるのまら別らららら及ら守らら
わらうらとね中しんるららららららら
後しんらとららららららららららららららら
のあまらうらららららららららららららららら
川の神身ららららららららららららららららら

思ひいひある神とららして清け打割らうまか
の存らよとらうらふ英とら年た病しじき
腐のしりはらよとらびく鈴とら切の巻し
しんるのまら別らららららら及ら守ららら
わらうらとね中しんるららららららららららら
後しんらとらららららららららららららららら
のあまらうらららららららららららららららら
川の神身ららららららららららららららららら

有佛性如來常住元之靈變易と云のたありこの
浪うらもらん所の國とぬ我仏はを社通を會ひ
靈地より一そ遠の十万里の蒼海と清くわつふ
よの葉に如くはけぬ流るまらぬこのは敷ふ
のやとたまえん人のとりまするこのまをばいよ
やぬうりつりこまやうそりとかう角四つ一玉
多秋も又天よありふ而の葉葉原の中はほとと
をうらもらんば葉のうらぬとるは我佛のうの

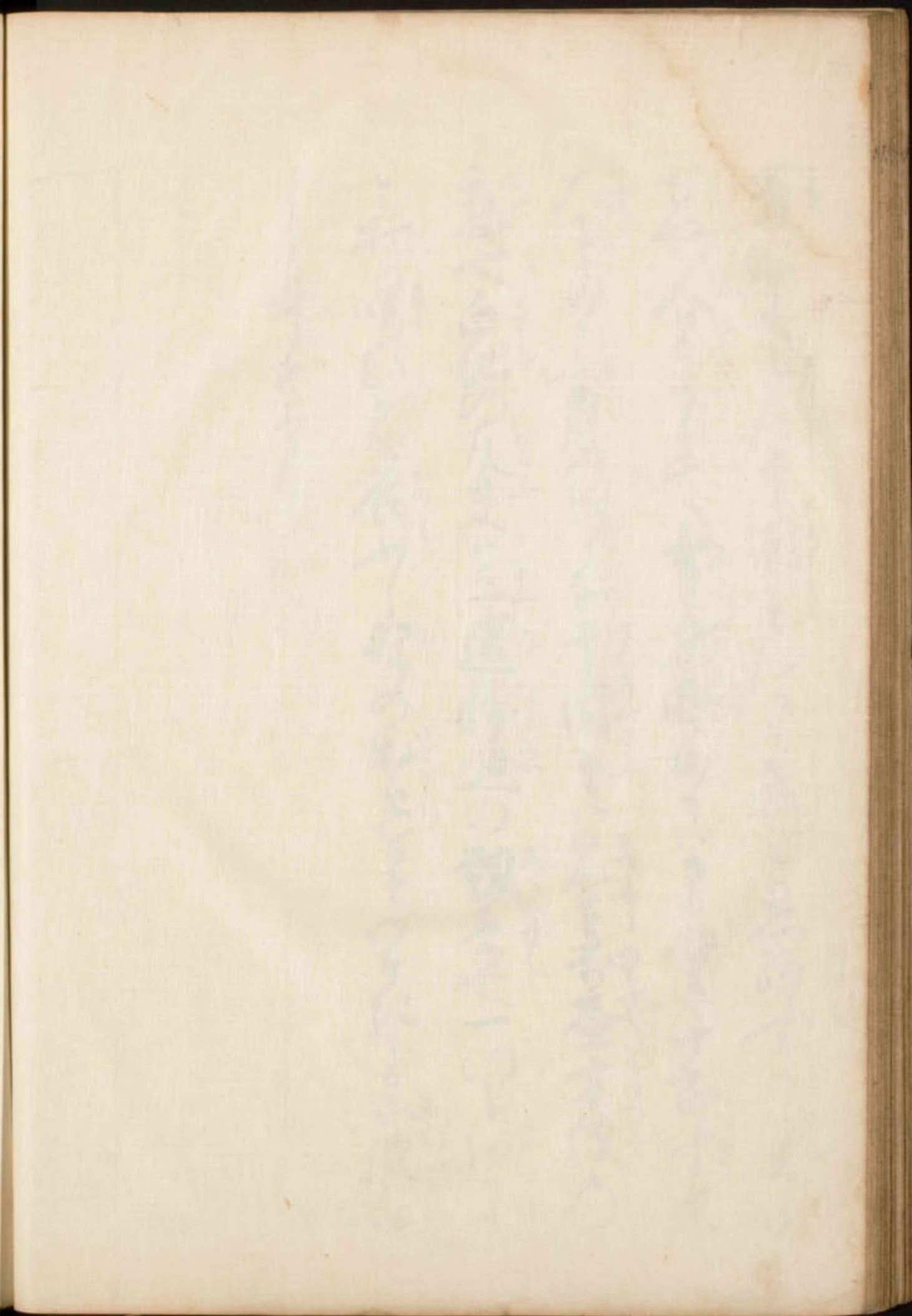
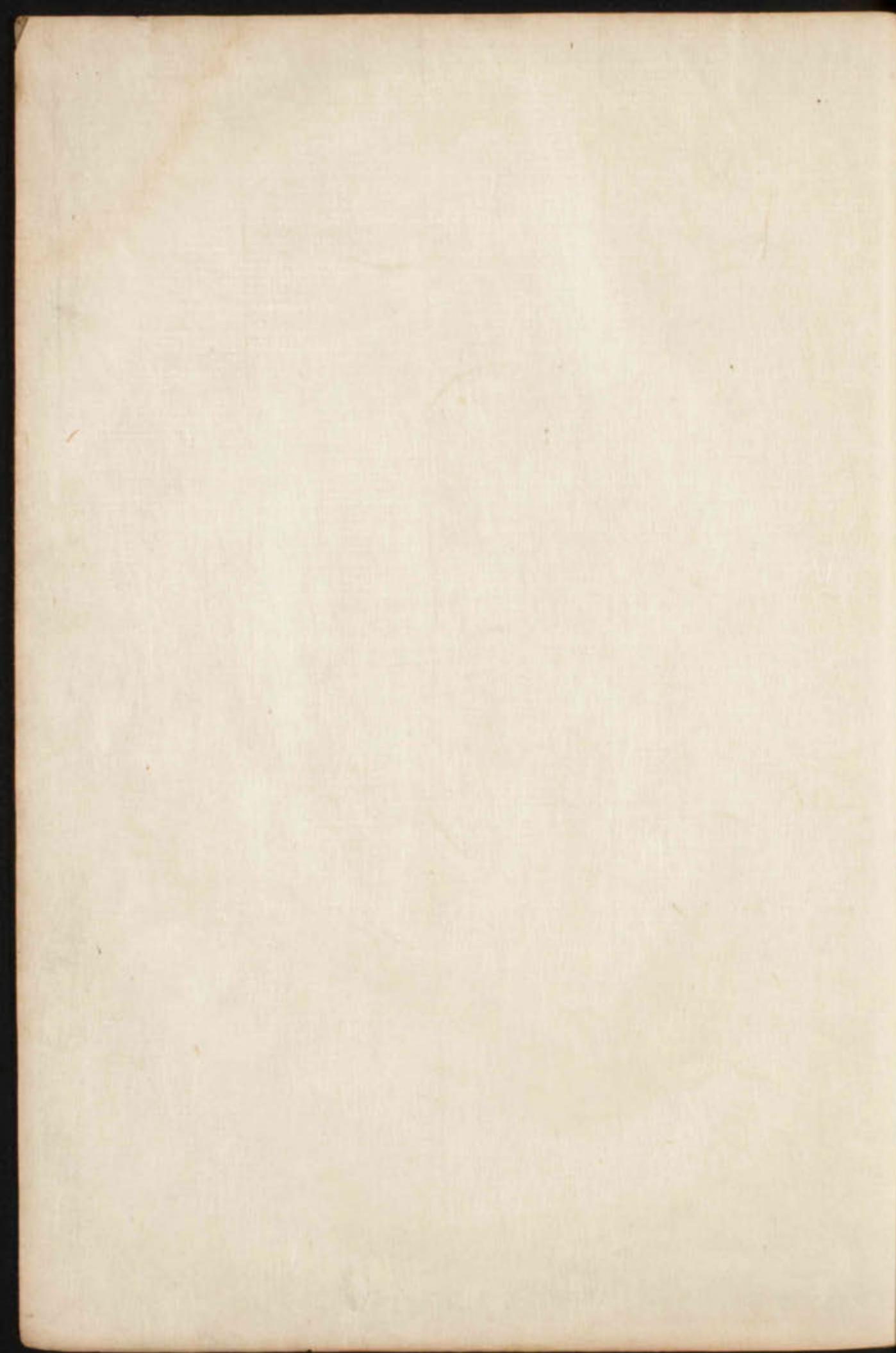
葉と表するをそりそりさるは人のまは葉のたま
達太子と生れく十年のまら此の山面右脇外
跡摺のぬとまら修まむはやとまら書信む令んは葉の
め神をまらじり一まら葉の清く如く中津國とあり
らうまら射うを葉月あをせらうそのの代をまら
ほの名字と人まらまら一まら葉の浦の色
と物とらう老翁あり秋まらはは向てまらまら一は
ふのやういば地と我へえをを佛は結果の地と

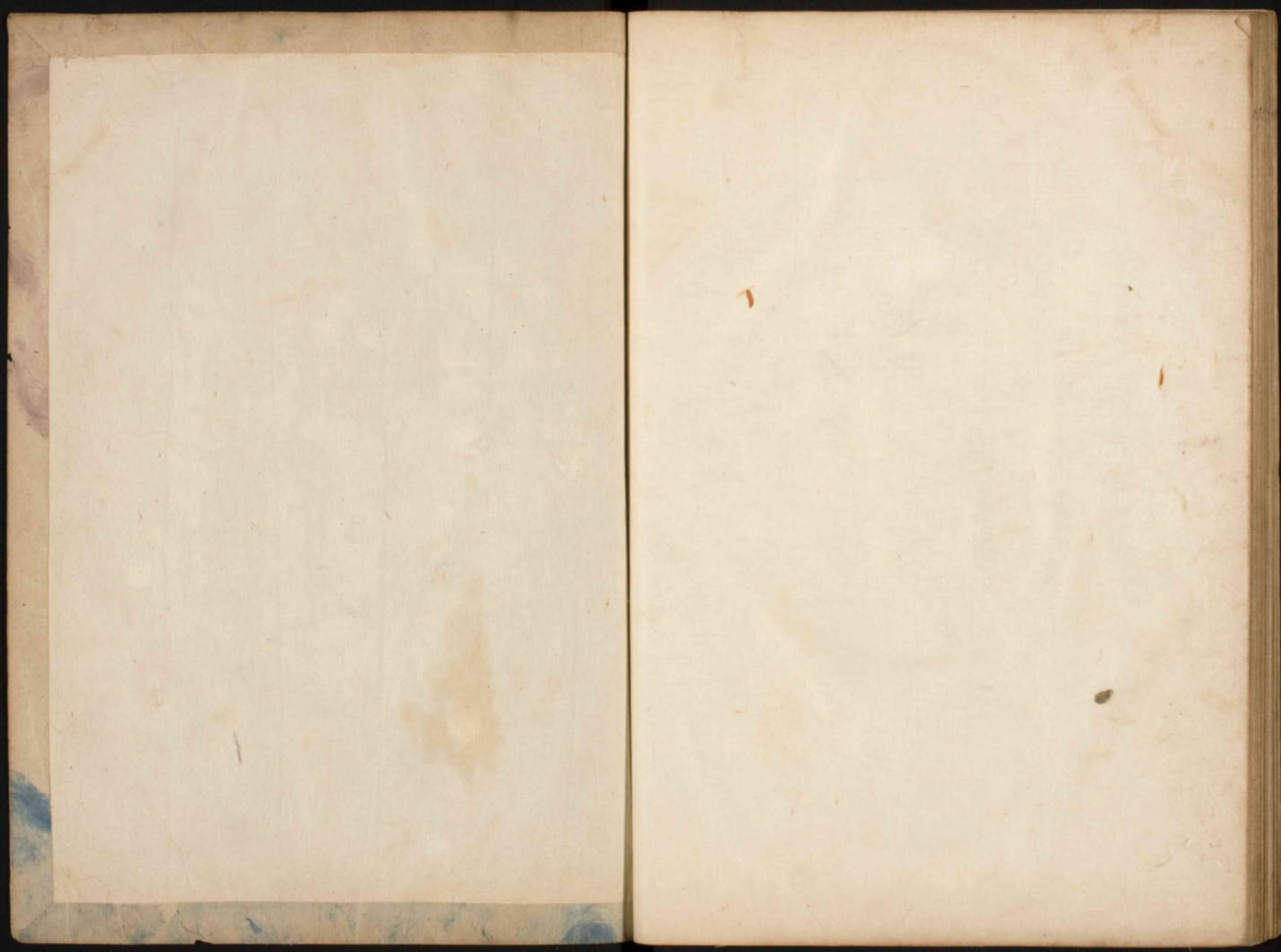
如命このと武むす多たの翁おきな答こたへてし我人われひと歩あゆむ力ちから果はたすのこゝろ
しりしりびびののかかららととててはは湖うみををななりり余あまもも憂うれははししと
ももふふくくんんららしし前まへへへはは地ち持もち果はとと女おんなのの物ものささ
不ふ失しぬぬややととささくく信しんせせとと念ねん力ちからくくててしし高たかきき会かい
よよろろととしし女おんなもも對たい東とう方ほうよりよりままささとと向むかへへててししのの業わざ呼よ
けけららままりりままりりぬぬいい善ぜんははししととやや信しんははととららぬぬ我われ人ひと
ああららままのの始はじめりりははおおののこころろををままししをを前まへむむししととままままと
ああららままららびびとと信しんははととららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ

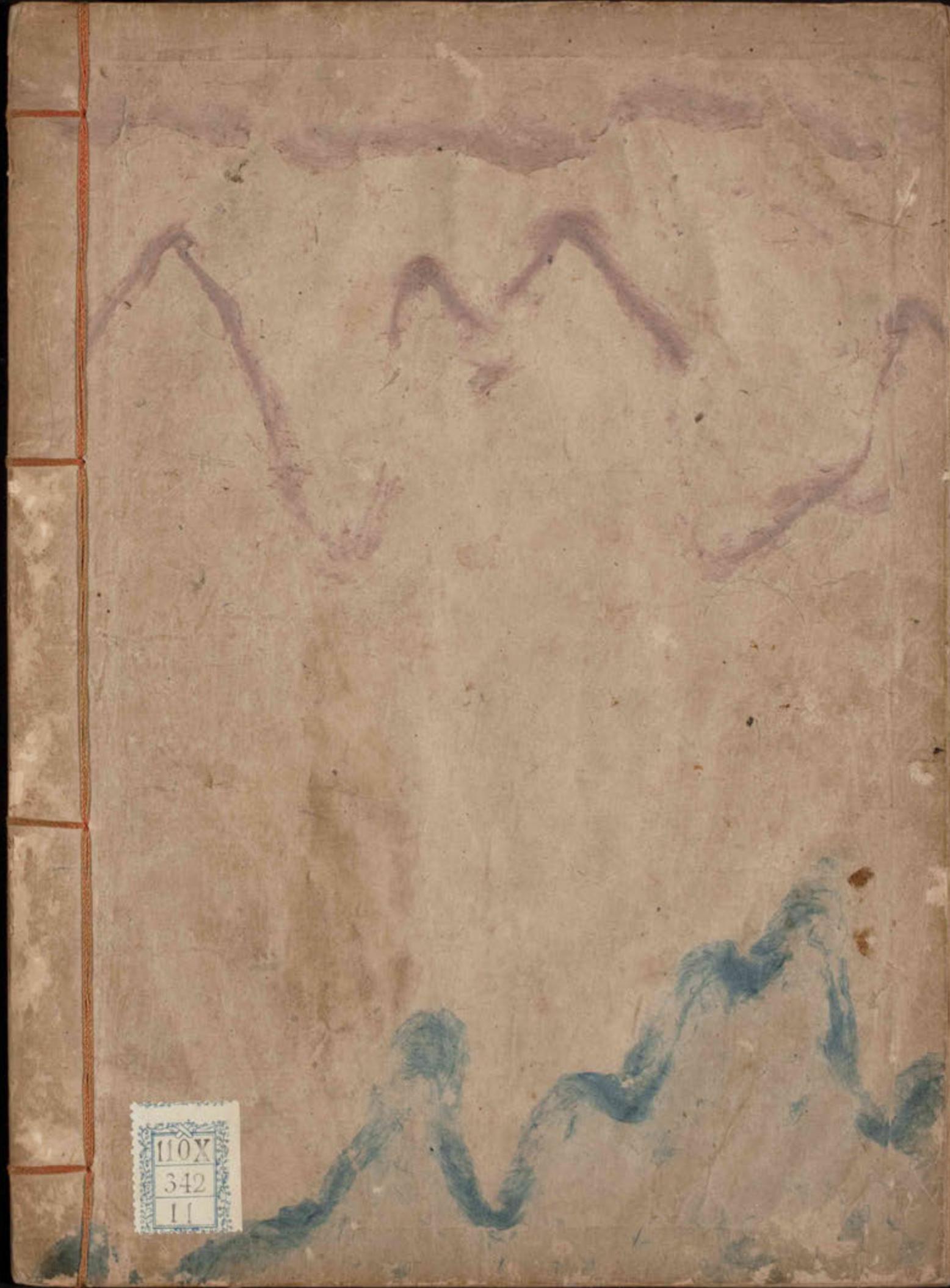
ややととぬぬててままままららぬぬ音ね果はのの佛ぶつははとといいららじじ命いのちととはは
ななららむむ修しゆ練れんををぬぬいいとと二に佛ぶつををぬぬままららむむとと女おんなのの老らう翁おきな
いいららむむとと信しんははととららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ
ままままららむむとと信しんははととららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ
遠とほくくららむむとと信しんははととららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ
たたららむむとと信しんははととららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ
命いのちととははししららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ
思おもひひ切きててととわわらられれよよららむむとと信しんははととららぬぬ我われ人ひとははししららぬぬ

まことなりて昔仏性國よ血のな降く國をうたむ
四門大よかふめいさしく情をたてて為さまはらう
たふ形と用くするにしれやうこのまことむおも
約牛てそを命に持る命とよきまに會得ぬの事
よ七夜産まてふちとむねに子余令せま申しり
撰牛くまはらう突のわらひばらるちありけを
人轉とそ身がうもやまうまはらう人位をてを
的し格らまよきり我よげ人轉をり成人をたてり

極鬼のなまよちりとのまと世風はたきまはらう
物よいららう牛食又四一能も若くはむすむはらう
よにたて食むて七まよ人まそ食らうそ能はらう
こく仏とぬまいしく難う若くはむすむはらう
うそ川守まぬいさうとく人轉も難とそなをらう
結像よ七をまよいまはらう終く仏果とたらうの像
よまよいはらうけの母よこや二道よ家もんとね
くそまらうそ七のたきまはらうま房かむ







110X
342
11